

# 山古志の持続可能性を維持し、豊かな生活を実現する小さな音楽会の試み

## We maintain the continuous city function in the mountains in Niigata Chuetsu area and suggest a rich life model

後藤 哲男

GOTO Tetsuo

近 善晴<sup>1</sup>

CHIKA Yosiharu

広川 智子<sup>2</sup>

HIROKAWA Tomoko

キーワード：山古志、新しい仕事、共同体

Keywords：yamakoshi, new work, community

Yamakoshi region, which has trapped in snow during the winter season, has been brought up a good community culture. Extensive damages caused by the Chuetsu Earthquake accelerated the transformation of the community. Today, community has entered a new phase.

"Yakushi no mori" is becoming a place that symbolizes the way of the new community.

The villagers held a handmade concert under the trees of "yakushi no mori". And they are trying to seek the way of the new community. Goto laboratory of Nagaoka Institute have studied how to engage in new work for the community maintenance.

### 1. はじめに

2014年5月に山古志の「薬師の森(写真1)」を整備し、「住民同士で集う楽しい場所をつくりたい」と山古志の有志の人達は考えた。山の暮らし再生機構山古志サテライト支援員の方々と長岡造形大学・後藤研究室と共に知恵を絞ることとなった。「薬師の森」は薬師堂・追分地藏<sup>3</sup>(写真2)があり、住民は昔から大事にしてきた場所である。「薬師の森」は以前、農作業小屋を建てていたが雪の重みで倒壊し、所有者が山古志を離れるなど手入れが出来なくなったことで、敷地は茅で覆われ荒れ地となった。ここの土地の魅力を知っている住民同士は「なんとかしたい」その思いから出発した。この薬師の森の整備をきっかけとして、持続可能性が問われている集落のあり方について考えることにした。

2013年の研究<sup>4</sup>を通して知り合った住民有志が「薬師の森」を所有者の許可を得て、土地を地域のために開放して



写真1 薬師の森



写真2 追分地藏

もらった。この場所を「どう活かし、どう繋げて、どう楽しめる場所にできるのか」ということを課題とした。こうした取り組みの底流には山の暮らしの良さを引出し豊かな生活を送ろうとする住民の意思がある。さらに震災前まで育んで来た共同体的な底流が、新たな局面を迎えどのように脱皮させられるのかを模索したいという意味も感じられる。この状況の中で長岡造形大学・後藤研究室がどのように関わり、住民の意思を尊重し何が出来るかを問いながら研究を進めた。本論はその研究の報告である。

### 2. 研究の目的・意義

2004年、新潟県中越地震で大打撃を受けた旧山古志村の中心的集落虫亀地域は震災前の145世帯441人から現在は116世帯340人の集落となった。全村避難から77%の回復であるが2014年はずいに新生児が一人も生まれなかった。日本が抱えている人口減少の問題が集約的に顕在化している。

震災復旧から復興へ、この11年間は村外の人々がめまぐるしく支援の手を差し伸べ、行政も二つの団体(社団法人中越防災安全推進機構と公益財団法人山の暮らし再生機構)を立ち上げ、山の暮らしを継続させるために住民と行政をつなぐ第3局として「支援員」制度などを創設し、活動している。

一方住民サイドは「常住のむらづくり」をキャッチフレーズに2009年、2010年度に策定された「虫亀コミュニティ形成プラン」を実行に移し、できる範囲でコミュニティの活性化と豊かな村の暮らしを実現すべく、奮闘努力中である。

先の11年は虫亀の住民にとって復旧から創造的復興の基本方針が見えてきた。その大きな柱は地域協同という概念である。住民の絆を深め、土地を愛し、豊かな生活を実現するために、高齢化の傾向にはあるものの、「まだ動けるうち」に大学や虫亀地域を取り巻く広域の人々の力を借りてでも、住民の身の丈にあい、実現可能と判断されることを一つ一つ実現していく作業を行っている。その作業を繰り返し子供たちに姿を示し、村が持続可能であることを将来に向けて担保したいというものである。

今回の実践的まちづくり提案は、震災後11年を経過した旧山古志村虫亀地域の次の10年に向けての第一歩として位置づける。長岡造形大学・後藤研究室として、調査研究を行い提案するだけでなく、住民と協同でできることは何かと考え、実践の手伝いをしようというものである。

日本有数の豪雪地帯である山古志の「山の暮らし」は住民同士が協力しあいながら生活を維持するシステムがある。村を維持する「仕事」と個人の経済生活を維持するための「稼ぎ」は山の暮らしの両輪である。山古志の養鯉業は個人的な「稼ぎ」の部分であり、住民同士はいわゆる競争他者の性格を持ち、これについて多く語られることはない。一方「仕事」の側面では積極的である。震災による人口減少、村が平成の合併で長岡市に編入され、かつては各集落にあった小学校も一つに統合された。盆踊りや祭りもその担い手が少なくなった。多くの村の「仕事」は公共サービスでまかなわれ、便利になった状態である。しかしそれで止まらず新たな「仕事」を渴望している姿が見える。山古志では、住民同士はある程度の距離感を維持し互いを尊重しつつ「仕事」をするコミュニティ維持のスタイルがある。ここに山の暮らしの豊かさの魅力がある。

山古志には有名な牛の角突き（闘牛）がある。この闘牛も震災以後、集落毎から一カ所での開催となった。入場料を課し観光化されている。しかし、今も虫亀地域、種苧原等には闘牛場が残り、住民は昔ながらの闘牛を再開させることを夢見ているのである。娯楽性だけでなく伝統的な行事であり、大切な村の「仕事」でもあったのである。

住民は昔からの「仕事」を継承すると同時に新たな「仕事」を通して新しい村の将来像を描こうとしている。その新たな「仕事」について本研究では深く調査し、公共の場としての「みんなの空間」像を構想し、住民が参加し、楽しみ、生き甲斐を実践する場の建設に深く係ることを考えたのである。

このような状況での「まちづくり」という作業である。言葉よりも、膨大な資金よりも、今ある人的資源を少しずつ補強していく作業こそが中山間地では最も求められていると考える。

### 3. 新潟県内の中山間地域の様々な取り組み

#### 3-1. 概要

2015年7月12日、長岡造形大学を会場に日本建築学会

北陸支部大会が開催された。学生による語り合いのシンポジオンでは、「建築家にできること」、「建築が実現できること」または「建築を学ぶ学生ができること」-中山間地域の生活をゆたかにするために-と題して実施した。パネリストに村木薫<sup>5</sup>教授と春日惇也支援員<sup>6</sup>を迎え、新潟県内の中山間地域の様々な取り組みを紹介しながら議論の題材と位置づけた。中山間地域のそれぞれの特徴から「新たな仕事」と位置づけた豊かな生活モデルについて考察する。

#### 3-2. 十日町市、津南町の場合

2015年で5回目の開催となる大地の芸術祭<sup>7</sup>は15年の歴史がある。越後妻有地域（十日町市、津南町）は日本有数の豪雪地帯である。その中の松代地域の1960年代の人口はおよそ1万3千人、現在は3千人台と地域の中でも最も過疎化が進行した。この松代地域に村木薫教授は第1回から今まで「土壁プロジェクト」を展開している。計10棟の民家、店舗を修復し、参加メンバーは魚沼テクノスクール左官科生徒、地元の大工さん、旧松代町商店街や近隣の人々である。「土壁プロジェクト」は、空き家を使った内外を表現の場とする作品ではなく、実際の生活空間に働きかける協働制作である。最終的に松代地域の共有財産となることを目的としている。また、「土壁プロジェクト」には3つの観点があると村木教授から示された。<sup>8</sup>

- ①地域の個性を見つめる一つの手段として、生活の風景があげられる。時間に耐えてきた姿を修復し、つないでいくことでその場所が持っている力、魅力を引き出す。「景観」という文化の力の蓄積に期待すること。
- ②職人と地域の人たちによる持続的な協働作業を通して、手作り感のある豊かな町並みをつくる。「私と隣近所」という意識が繋がり、コミュニティのあり方や帰属意識、そこから将来のことや希望を語り合う場がうまれることを促す。地域の誇りや愛着の目覚めを期待すること。
- ③住民同士の日常生活が垣間見られるような肩の凝らない街並み、周辺の山や川や土地の由来を大事にし、その場所に根差した必要性に寄り添い、敬意を払う。大量生産消費型のモノ作りではない、人とモノの関係の中にある当たり前前の秩序から生まれる美しさをつくる。平穩無事の美を目指す。

村木教授は継続的に使われる住まいの環境と協働する美を「新たな仕事」と位置づけ積み重ねてきた。その、仕事は住民の新たな共有財産として息づいている。

#### 3-3. 川口町の場合

春日支援員は山の暮らし再生機構の支援員として中越大地震の震央に位置する川口地区の復興に大学卒業以降関わってきた。地震前から過疎化は進行していたが、甚大な被害を受けた小規模な集落では20年分の過疎化が一挙に進行したとも言われ、状況は深刻である。持続可能な地域を目指した支援事業の骨格には3つの観点があると春日支援員から示された。<sup>8</sup>

- ①新しい自治の仕組みづくり事業
  - ・NPO、行政などと共にこれからの地域振興・地域課題の解決に向け検討する。
- ②集落支援事業
  - ・地域活動団体の活動支援。
- ③新しい主体、担い手づくり



- ・地域資源の掘り起こしにインターン制度を活用する。
- ・地域に人が循環し、活動できる仕掛けづくり。

活動の一環として2015年から始めた「木沢集落の里山ハウスプロジェクト」は川口に移住するための入り口となる拠点施設づくりである。手軽に利用できるこの施設を通して「お試し滞在」ができ、木沢集落の暮らしを学ぶことができる。1階は土日にそば屋を営んでおり、建物の2階を改造する。春日支援員は近隣の3大学（長岡造形大学、長岡技術科学大学、新潟工科大学）の学生にボランティアを呼びかけ、里山ハウスの具体的なアイデアを練り上げようとしている。約10名の学生が呼応し、住民や支援員と協働することになった。

春日支援員は、住民と学生のかけ橋となりながら、新たな住民のお試し滞在できる場所づくりを「新たな仕事」と位置づけた。多くの声や知恵をもとに協力して取り組んでいる。

十日町、川口のそれぞれの取り組みに共通することは、住民が主体となり豊かな生活のために今何ができるかと向き合っていることである。そして、様々な力も借りながらアイデアや計画を実行へと結びつける力がある。それは除雪に苦勞していたら手助けし、野菜が多く収穫出来たらお裾分けを行う日常が当たり前の環境として根付いているからである。隣近所で互いに助け合い、自分のため、人のために労を惜しまない精神が中山間地域に息づいている。この地域が目指す豊かな生活の「新たな仕事」が住民の心を活性化する起爆剤となっている。



写真3 蕎麦祭り



写真4 意見交換

#### 4. 山古志・虫亀の「仕事計画」概要

「新たな仕事」に結びつく「みんなの空間」として「みんなの建築」をテーマとする。このテーマを大学の授業<sup>9</sup>の題材として取り上げイメージを提案する。学生と共に毎年試案を作成している。

2014年、学生は山古志を詳しく知るため様々な催し物に参加した。8月に開かれる仮装盆踊りは住人の方から誘われ盆踊りも参加した。住民から踊りの振り付けを教わり、他大学の学生もボランティアで加わり住民と観光客と学生の仮装盆踊りは大いに賑わった。11月にはそば祭りが開かれ、観光客と住民がそばと天ぷらを囲んで同じテーブルで食を楽しむ。子供達は集まり、笑いの絶えない場となる。学生もそばや天ぷらをご馳走になり、住民の方々から意見を聞き山古志の暮らし方や時間の過ごし方、空き屋の現状、今どんなものを必要としているのかなどたくさんの声を聞く事が出来た（写真3, 4）。

この経験をもとに各学生がその土地で何を感じ何を調べ、何が提案できるのか設計作業に至るまでの流れを経験した。教員とのエスキスを重ね提案内容について山の暮らし再生機構山古志サテライト支援員の方からも意見を頂き（写真5）提案の可能性を広げる。



写真5 山古志サテライト支援員との意見交換



2014年は「村のダイニングキッチン」「村の子供と都会の子供の勉強部屋」「村の応接間と客間」「村の住民の作品展示場」「村の音楽広場」を提案した。

例えば、高齢化世帯が増え、独居老人が増えるなか、都会では食事の宅配弁当が普及しているが、徒歩圏の小さな村では「村のダイニングキッチン」が機能しないだろうか。食事を作ることが大変になった高齢者は少額の料金を近隣の友達と食事する。自作の野菜を代金代わりに、自分の成果を人に楽しんでもらうこともできる。料理が得意な人は食事を作るといふ「仕事」ができる。このような「みんなの建築」の仕組みと建築について授業を通して提案した。

以上のような建築を考える上でのプログラムを学生も経験しつつ、住民からも提案された「村の音楽広場」の計画の実現を本研究の目標と位置づけた。これは2014年から住民の有志と後藤研究室が協力して「薬師の森」の萱を刈り、整備した土地を舞台に交流の場へむけた研究となった。

## 5. 実施内容

### (1) 村の音楽広場の計画

虫亀集落を眼下に、福島県と長野県の山々を遠望する風景は客に提供するばかりでなく、素晴らしい大自然の中で音楽を奏で、それを楽しみたいという住民の夢を大切に育てる試みである。美しい棚田、その棚田に張られた水が太陽の光を反射し輝いている。カメラを携え虫亀地域を訪れた人たちの撮影スポットになり、遠くの山また山に囲まれた見渡す限りの270度の大自然である。山古志へ訪れる観光客との交流の場となり同時に、虫亀の人々が住んでいる村の素晴らしさを満喫できる格好の場となる。訪れた観光客も山古志の魅力をもっと発見し、また訪れてくれる可能性もある。この薬師の森の場所と人々の営みが合わさることにより山の暮らしの豊かさを証明することができる。また、2004年10月23日の新潟県中越地震以降、もとの集落に戻らなかった若年層をもう一度山古志に惹きつけることができるかもしれない。

家屋が倒壊し長く放置され荒れたその場所を整備し「村の音楽広場」として計画し、打ち合わせを重ねて2015年の5月に「薬師の杜・杜のコンサート」の演奏会の実施を目指す。

### (2) 敷地の特徴



写真6 棚田と山々

金倉山展望台手前に位置する薬師の森は虫亀集落と棚田を眼下に福島県の山々を遠望する（写真6）。敷地下部に住民が手入れしている花畑が一面広がる。

### (3) 敷地の整備



写真7 茅を集めている



写真8 剪定作業

虫亀の住民と長岡造形大学後藤研究室が1年ほどかけて萱を刈り（写真7）、廃材を撤去するなど整備した。杉の枝打ちを行い（写真8）、見晴らしを確保する。

観光客は景色の雄大さに驚嘆し写真に収め、住民は説明役を買って出ている（写真9）。



写真9 作業中に訪れた観光客





写真 10 杭打ち

茅を刈った薬師の森に簡易ベンチを作り、法面に安全のためのロープを張る（写真 10）。

#### (4) 準備

定期的に敷地の整備を進めながら、「杜のコンサート」の実現へ向けて打ち合わせを重ねた。その後、「虫亀地域活性化・文化保存会」が中心になって準備を進めた。

コンサートをどのような性格にするかは住民有志にはイメージがあったようである。市の助成金にも支援員の助けを借りて応募した。

会場は写真に示す通り広々としたところであるが、当初は簡易的な杉の立ち木からワイヤーで吊る天幕の計画があったが、予算がなく断念し、観客席として廃材の角材を並べただけのしつらえをした。

当日は山古志中学校小学校の児童や生徒にも参加してほしい意向であったが、春の運動会と重なって子供達は不参加となった。山古志の人々は小学生と中学生がやたらに忙しいと言いながらもその参加は当たり前としていることが重要である。



写真 11 打ち合わせの様子

#### (5) 演奏会

##### ■音楽会の概要

日時は 2015 年 5 月 17 日(日) 13 時 30 分から「薬師の杜・杜のコンサート」を開催した。演奏者は篠笛・鬮牛太鼓・

クラシックギター・ラテンバンドである。当日は参加無料とし、虫亀の住民や観光客、大学生など多くの人達に会場頂き、眼で山並みを肌で風を感じ耳で美しい楽器の音色や歌声に触れ、約 150 名<sup>10</sup>の聴衆が楽しんだ。

##### ■会場の様子

当日、午前中に関係者や演奏者が集まり打ち合わせを行いその後、会場にてリハーサルを重ねた。

270 度見渡せる開かれた視界と取り囲むような杉の木々が反響板の役割となり、奏でられた音楽に包まれた（写真 12）。演奏会がはじまると聞き入って目を瞑る人、即興での演奏や他グループとのセッション、その場のリクエストなど手拍子で会場一体となる場面もあり盛り上がった。



写真 12 音楽会の様子

#### 6. 今後の課題と可能性

第 1 回の演奏会は晴天の下で無事終了した。山古志の集落は様々な催しをもっている。今回の音楽会は新しい企画であったが、音楽会の出演者は予め集落センターに集まって、スタッフからのお昼ご飯のおもてなしがあった。棚田米のおにぎりである。このように、村の行事になった時の準備は特別であることをここでは指摘するにとどめるが、都会では味わえない趣がある。

村の行事はこのように村人の誠心誠意のおもてなしの精神が発揮されて成立っている。そのためむやみに新しい行事を増やすことは差し控えてならないし、たとえ企画したとしても村人の身の丈を超えてしまう可能性がある。

震災以来自己完結型の村の形から、外部の人々を取り込む形での新しい共同体のあり方が模索されている。「新しい仕事」はその新たな共同体維持のための仕事であるが、毎年この音楽会を楽しみにするような風潮が生まれ、この仕事に楽しみと誇りが持てるようになれば山古志の持続可能性が少し確かなものになったといえるのである。

継続的な機能を維持するためには、人が動き、その場所に住む人が主体的に活動することが第一条件である。現在の山古志はまだこの力が残っている。「なんとかしたい」が「なんとかできる」と確信がもてるまでの継続が必要である。

## 注釈

- <sup>1</sup> 長岡造形大学 卒業生（2014 年後藤研究室所属）
- <sup>2</sup> 長岡造形大学 研究員
- <sup>3</sup> 薬師の森の入り口にある看板に記載。内容は以下の通りである。  
「薬師堂は病気を治し、安楽を与える医薬の仏「薬師如来」を祀っている。その昔、冬の峠を超えようとした人がお堂で一晩過ごした夜、幼子を亡くした母親の幽霊が薬師如来を頼りに、子供の蘇生を願って現れたといわれている。傍には旅人に道案内をする「右ハやまみち」、「左ハこぐりやま」と刻まれた追分地藏がある。」
- <sup>4</sup> 長岡造形大学：長岡造形大学研究紀要 第 11 号、山古志郷土玩具「木牛」づくりの試み、pp159-167、2013
- <sup>5</sup> 新潟中央短期大学 教授
- <sup>6</sup> 山の暮らし再生機構・川口復興 支援員
- <sup>7</sup> 越後妻有 大地の芸術祭の里 大地の芸術祭とは：  
<http://www.echigo-tsumari.jp/about/overview/>  
2016.4 閲覧  
内容は以下の通りである。「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレは、過疎高齢化が進む日本有数の豪雪地・越後妻有（新潟県十日町市、津南町）を舞台に、2000 年から 3 年に 1 度開催されている世界最大級の国際芸術祭です。」
- <sup>8</sup> 日本建築学会北陸支部：北陸の建築やまちに関する各種情報をお届けするマガジン Vol.52 2015/09/30
- <sup>9</sup> 長岡造形大学：空間デザイン演習Ⅱ（3 年生後期）、山古志を題材に 2014 年から実施、教員は後藤哲男教授・小川峰夫非常勤講師
- <sup>10</sup> 新潟日報：朝刊、平成 27 年 5 月 20 日 16 面に掲載